

ウラゴマダラシジミとの初の出会いは1956年5月20日に高知市小高坂山へと遠征したミカドアゲハを主目的とした青柳中学校科学班の新入り1年生で参加した採集会。食樹のイボタの花から離れた場所で白が目立つ大きなシジミチョウだな、と何気なく捕獲したのが本種のメス個体で、ミカドアゲハとともに採集できたのは筆者だけだった。この日は、その後宅地開発で自然破壊が進んでしまった円行寺で、路面で吸汁する多数のイシガケチョウを観察し、橋のたもとに自生するエノキで大量発生したヒオドシチョウの蛹を持ち帰るなど、鮮明な記憶に残る一日となっている。加古川周辺に本種に出会える産地があつてギフチョウ・ネットの友人たちが毎年その撮影に出かけているが、筆者はその場所も知らない程度に本種に対する関心が低く、二度目の出会いが1973年8月9日に2才の長男と1才の娘をつれて家族で訪れた笹ヶ峰高原で、三度目が2005年7月21日の北海道布礼別川林道といった調子。

July 21, 2005 (木) 白金温泉→望岳台→上富良野→布礼別川林道

9時過ぎに到着したこの日の布礼別川林道は、昨日よりも明るく、例の材木置き場の湿地帯に新鮮な2頭のキアゲハが訪れている。ヒオドシチョウ、C-タテハ、コムラサキもいるがその数は少ない。キアゲハのカメラ撮影にチャレンジするが敏感すぎてシャッターチャンスをくれない。1999年7月にも3頭が連なってきれいに飛ぶ光景をビデオ記録しそこねた対象だが今回も成果なし。ゼフィルスは昨日と同じメスアカミドリシジミと、近畿地方で知るイボタとは異なる種類の木にあきらかな執着をみせる飛翔でゆるやかに飛び交うウラゴマダラシジミ以外には姿をみせない。このウラゴマダラシジミをネットインすると想像以上に翅表の薄紫が味わい深く美しい新鮮個体なのでついつい5-6頭を採ってしまうが、どこから湧いてくるのか、ゆるやかな舞いは途切れることなく続く。



June 11, 2014 ミドリシジミが棲む加古川市郊外へ

ヒメヒカゲの調査途上でミドリシジミに会えたことから、その開翅姿勢の撮影を期待して東播磨郊外の生息地へとでかけてみる。ハンノキを叩いて驚かすと、ひらひらと飛び出して近くに止まるが、雲の厚い天候ではなかなか翅表を開いてみせてくれる個体が現れない。わずかに美しい緑色の輝きを見せてくれる個体を見つけずばやく撮影。ミドリシジミが開翅してくれそうにないのであきらめて帰ろうとしたとき、林縁でウラギンシジミらしき白が舞う。近づくと何とまったく予期していないウラゴマダラシジミ。すでに後翅の一部に傷みがみられ、きれいな翅表をみせてはくれないが撮影記録を残す。

